

NEWS

開港のひろば

Number

73

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100
ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

発行日／平成13年8月1日(水)
印刷／中川印刷株式会社



明治35年ころの茂木商店員 勝野正彦家所蔵

企画展 横浜商人・繁栄の60年 —野沢屋・茂木商店とその人びと

初代茂木惣兵衛（初代保平）
『実業人傑伝 全』明治28年刊より

今回の展示の副題をみて、懐かしさを感じる方も多いであろう。野沢屋の屋号は、伊勢佐木町のデパート「野沢屋」として戦後も横浜市民に愛された。しかし、その野沢屋を発展させた茂木惣兵衛という人物は、今日忘れ去られようとしている。

初代惣兵衛は、文政一〇年（一八二七）上州高崎に生まれた。安政六年（一八五九）横浜が開港すると、野沢屋庄三郎の店に入り、文久元年（一八六一）庄三郎逝去により、野沢屋のれんを継承した。幕末には有力生糸商としての実力をつけた惣兵衛は、多角的な事業経営にのりだし、明治七年（一八七四）呉服店を独立させ、さらには薬種人参・洋糸・洋織物・海産物などもあつかった。次代の二代保平は、茂木商店・茂木銀行・野沢屋輸出店・野沢屋絹商店・野沢屋呉服店・茂木土地部、に

幕末に進出した生糸商人のほとんどは、明治一〇年ころまでに蹉跌し、横浜を去ってゆく。今回の展示は、横浜で生き残る経営戦略を野沢屋茂木商店の事例をもって考えてゆくことに第一の課題をおく。横浜開港資料館では、幕末～明治前期の有力生糸商吉村屋幸兵衛の成長過程を事例とした成果があるが、茂木の場合吉村屋ほどには資料は恵まれていない。しかし茂木は、恐慌で倒産するまで、横浜経済界のトップリーダーの位置にあった。この三代六〇年の長期を対象として課題を取り組みたい。

三溪園を残した原家とちがい、今日横浜にあって茂木をしのぶものは乏しい。商店員のさまを示す写真・資料の紹介、横浜市民との接点であった野毛山別邸での菊花展など、横浜商人の多角的な描出が、第二の展示課題である。

（平野正裕）

経営を分離し「茂木の六大事業」といわれる多角経営をすすめ、支店を海外に設けた。製糸業を興し、羽二重輪出を振興して福井に力織機工場を建設した。

繁栄の野沢屋茂木商店

新たに発見された資料から

初代惣兵衛の手紙

横浜商人の代表にのぼりつめた初代茂木惣兵衛とは、どのような人物であつたろうか。実はほとんどわかつていない。伝記記事も複数あるが、内容は似たりよつたりで、元本は一つとの印象がある。

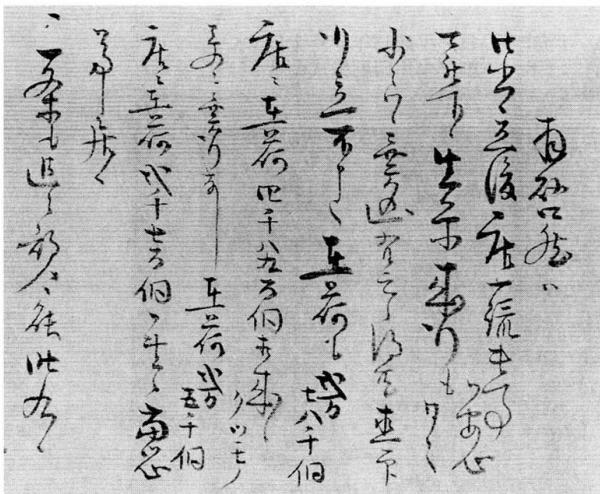
商才に長けているところはいわずもがなであるが、生存当時の雑誌記事で、惣兵衛の人となりを伝えるものとしては、等しく公共心に富んだ性格が語られている。「博愛家の称号は横浜市民によりて氏に与えられたり」「公共事業より慈善的其他社寺仏閣の捨金迄未だ一も辞したる事号明治二七年刊)。三代惣兵衛も、幼少時に亡くなった祖父のことを、寝床に火消しのハッピを用意し、火

災があれば直ちに現場に駆けつけ、焼け出された家族に、名も告げず懷中の百円を渡したり、郊外の不便な場所に自費で橋を架けたりしたと記している(『茂木惣兵衛遺文集』)。また惣兵衛の死に際して、その遺志で葬儀は簡略におこなわれたが、横浜ほかの貧民五千人に対して施米金五〇錢が配られている(『時事新報』明治二七年八月二八日)。

このような初代惣兵衛の人となりを別な方向からうかがえる資料として、手紙がある。惣兵衛を横浜の野沢屋庄三郎に紹介したのが、信州佐久の中山浜次郎であることは、惣兵衛の伝記にあきらかであるが、中山は、嘉永期に惣兵衛が養子に入つていた桐生の絹物商新井家と取引があつた呉服商であり、また惣兵衛とは生涯を通じた盟友である。明治期は横浜に居をかまえ、息子たちに佐久での事業の指示などを発した。

1 初代惣兵衛の書簡(前半部分:全体は展示パンフレット参照)

山田静夫氏蔵



初代惣兵衛の書簡(前半部分:全体は展示パンフレット参照)
山田静夫氏蔵

店員たちの勉強会・スポーツ

今回の展示では、商店員のコーナーを意識的に設けたのが特徴といえる。この手紙全体がかもしだすものは、横浜最大の生糸商惣兵衛の自信と、無駄を排する合理的性格であるように感じられるがいかがなものであろうか。

文面では生糸の不況に当惑しているが、この手紙全体がかもしだすものは、横浜最大の生糸商惣兵衛の自信と、無駄を排する合理的性格であるように感じられるがいかがなものであろうか。

この「会規」が作成されたのは、大日本帝国憲法が発布された月である。原善三郎・茂木惣兵衛(二代)・小野光景を筆頭に横浜貿易商有志研究会が設立され、一九日には町会所で参会者四〇〇名で憲法研究会が開かれている。四月の横浜市制施行もかけられた政治の季節であった。

そのような政治に対する市民意識の高まりに迷わされないよう、学術商業上の勉強会が茂木商店内に設立されたといえる。会規には、支配人

佐久の生糸荷主をつめて茂木に出荷する企組商會も組織している。茂木店からの書簡は、中山の親戚である中野市の山田静夫家文書におさめられているが、店からの通信をのぞい

た惣兵衛自身の真筆となると、わずか一通しか確認されていない。

写真1は明治二四年

焼け出された家族に、名も告げず懷中の百円を渡したり、郊外の不便な場所に自費で橋を架けたりしたと記している(『茂木惣兵衛遺文集』)。また惣兵衛の死に際して、その遺志で葬儀は簡略におこなわれたが、横浜ほかの貧民五千人に対して施米金五〇錢が配られている(『時事新報』明治二七年八月二八日)。

このような初代惣兵衛の人となりを別な方向からうかがえる資料として、手紙がある。惣兵衛を横浜の野沢屋庄三郎に紹介したのが、信州佐久の中山浜次郎であることは、惣兵衛の伝記にあきらかであるが、中山は、嘉永期に惣兵衛が養子に入つていた桐生の絹物商新井家と取引があつた呉服商であり、また惣兵衛とは生涯を通じた盟友である。明治期は横浜に居をかまえ、息子たちに佐久での事業の指示などを発した。

この「会規」が作成されたのは、大日本帝国憲法が発布された月である。原善三郎・茂木惣兵衛(二代)・小野光景を筆頭に横浜貿易商有志研究会が設立され、一九日には町会所で参会者四〇〇名で憲法研究会が開かれている。四月の横浜市制施行もかけられた政治の季節であった。

めざるをえなかつたことによるが、その結果さまざまの資料に出会えた。

明治二年(一八八九)二月の蘭契会なる勉強会の「会規」が、茂木商店に勤務していた勝野又三郎(岐阜県の器械製糸家勝野吉兵衛の子)の家に残っている。同家には茂木商店からの辞令なども残っている。

「蘭契」とは心のよく合つた交わり、親しい親交の意である。会規の緒言には、「吾済ハ政治上ノ論議ヲ謹ンテ之ヲ避ケン故ニ政治的ノ結社ニアラス、吾済ハ空談者派ノ輩ニ倣ハス故ニ空談家ノ集会ニアラス、智慧ヲ交易シテ相互ノ実益ヲ進メ真理ヲ討究シテ応用ノ道ヲ謬マラス、以テ着々理論ト実際ノ提撕併進ヲ勉ムルハ則チ吾済ノ最要目的」とする。政論・空談を排し、知識を交換して真理の追究するという立場を明らかにし、活動は毎月一回の演説討論会、学術商業問題の研究にあり、論説・雑報・筆記などを編集して会員の回覧に供することをうたっている。

その結果さまざまな資料に出会えた。



2 茂木合名会社運動部員・テニス 大正期 曽野康子氏蔵

級の人物以下三八名が名を連ねているが、店員のどのあたりからの発起かは不明である。しかし会規にある「本会一切ノ経費ハ特別寄贈金ヲテ之ヲ補充ス」の一条から、店主の懐ろから資金が出ていることがわかつた。蘭契会の実態を示す資料は残っていないが、商店員に規律をもたらす機能があったことは想像できる。

写真2は、「茂木運動部員」と裏書きのある大正期の写真である。第

二列右から四番目の中村彦太郎氏の家に残ったものである。場所不明であるが、テニスを終えたあの茂木商店員たちの姿がある（厳密には茂木合名会社員とするのが正しい）。

大正期の『横浜貿易新報』をくわでていると、横浜の商店員・銀行員などによるスポーツの記事に接することがある。とくに野球は人気があり、新聞社は大会を企画し、その記事を独占的に掲載して、発行部数獲得策がある。

華の名残

茂木商店と比肩する生糸商原商店の主人善三郎・富太郎の二代は、三溪園を残し、繁栄のさまを今日に伝えている。これに比する茂木の遺産は何であるうか。



3 野毛山茂木邸の菊花展にて 大正期 長與俊雄氏蔵

ヨン支店長などを歴任。三代惣兵衛の時代、茂木合名会社を統轄する茂木總本店理事として手腕をふるった。茂木崩壊の後は、日清製粉監査役などをつとめた。その妻沢子は先述の中村彦太郎の姉である。

この菊花展の年代は不明であるが、ご子孫の長與俊雄家に残る他の写真で判断すると、大正中期のものと思われる。程三の茂木における絶頂期の写真である。

3 野毛山
鉱工業を傘下にし、拡大路線を走っていた茂木合名会社は、大正九年（一九二〇）恐慌で倒産、三年後関東大震災

で石碑「茂木氏梅園記」に刻まれ、現在も園内に残る。長與と茂木の関係は深く、明治一〇年鎌倉海浜院（療養施設）もこの両者を軸に建設されていいる。

春が梅なら秋は菊である。野毛山の茂木邸では、毎年天長節の十一月三日に菊花展が市民に公開された。いつ始まったかは不明であるが、初代惣兵衛の晩年には恒例行事となつ

二九

写真3は、大正期の茂木邸での菊花展の様子である。左のシルクハットの男は、茂木合名会社理事の長與程三、専斎の次男である。

長與程二は、初代惣兵

治二七年（一八九四）、茂木商店に

入り、翌年アメリカ留学して商業を
修め、茂木輸出部の幹部となり、リ

本誌『開港のひろば』に、茂木関
理の記事を掲載すべく回観成してある

連の記事を過去二回掲載している。(四四・五一・五四・五五・六四・七一の各号)。記事に紹介した資料も今回展示されているので、『開港のひろば 復刻版II』等でご参照い

良家の全国組織である秋香会神奈川支部会の菊花展が催された。その後戦時体制下にいたるまでたびたび野毛山公園を会場として秋香会の菊花展がひらかれ、失われた茂木の栄華を横浜市民に想起させるものとなつた。

良家の全国組織である秋香会神奈川支部会の菊花展が催された。その後戦時体制下にいたるまでたびたび野毛山公園を会場として秋香会の菊花展がひらかれ、失われた茂木の栄華を横浜市民に想起させるものとなつた。

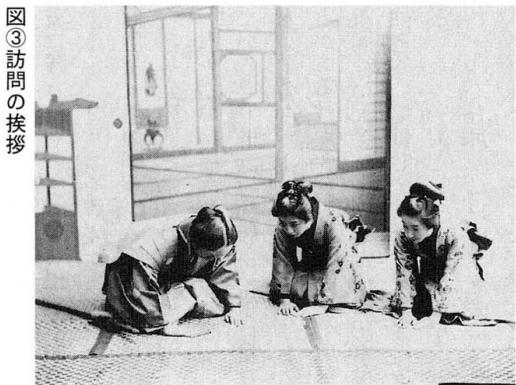
(平野正裕)

日下部金兵衛ゆかりの人々 —プライベート・アルバムから—

金兵衛写真館のスタジオで撮影された
金兵衛の家族写真

現在でも写真館で肖像写真を撮影する場合には、バックに垂幕か投影によって絵柄や模様を配置する。明治時代には、「書割」と呼ばれる絵やさまざまな小道具が使われた。前回の企画展示「明治のハイカラ写真館—日下部金兵衛とその世界—」で展示された資料から、金兵衛写真館（「金幣」は商号）のスタジオの様子がわかるものを、金兵衛のプライベート・アルバムから紹介しよう。

図①は金兵衛写真館のスタジオで撮影された金兵衛自身の肖像写真。バックの富士山と農家の絵や手前の木組や草は金幣写真館の定番ともいべきもの。また、この写真は写真館営業当時の金兵衛を写した現存唯一のものである。



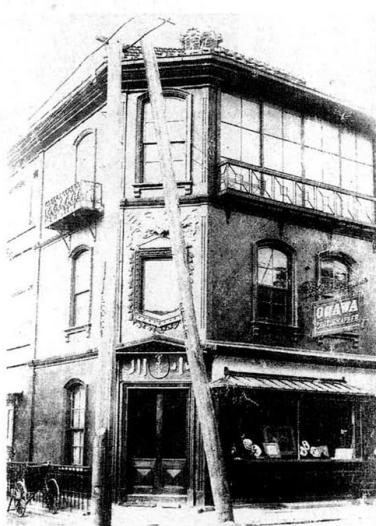
図③訪問の挨拶

金兵衛のプライベート・アルバムには、金兵衛と交際のあった何人かの写真家の肖像が含まれている。もっと多いのは娘婿の小川佐七である。佐七はおそらく金兵衛写真館で修業したのち、明治二十九年頃、境町一丁目で開業。四〇年一〇月、弁天通二丁目二三番地に合資会社小川写真店を開設するが約一年で解散、単独経営に戻る。当館が入手した小川写真館製作のアルバムの印には、太田町一丁目一三番地と記されているので、ここに所在していた時期もあるようである。

アルバムの内容は金兵衛のそれとほとんど変わらない。また、小川写真館の封筒には、アルバム・幻灯板・絹団扇写真の販売など、金幣写真館と同様の営業内容が記されているし、金兵衛のプライベート・アルバムに含まれる小川写真館の外観や内部の写真には、それらの商品が陳列されている様子が写されている。小川写真館は金幣写真館の分館、あるいは支店のような存在だったのである。おそらく、



小川写真館内のマツ



弁天通2丁目の小川写真館

金兵衛の娘婿、小川佐七について

小川佐七は金兵衛の事業を継承する予定だったのだろう。ところが佐七は四二年七月、金兵衛に先だって死去してしまった。その結果、残念ながら金兵衛の事業は断絶してしまったわけである。（前号で、「小川佐七が事業を継承した」と書いたのは誤りでした。訂正します。）（斎藤多喜夫）



小川佐七

歴史を集めつむぐ仕事

最近、ある大都市の自治体史(編纂事業が「曲がり角」に来ているとの新聞記事が出た。編纂は百年前にスタートしたが、明治維新に到達するまでなお三十年を要し、当局は財政上の理由から外部委託など検討していると云う。

開港資料館では、昨秋、横浜の古
史編纂の歩みをたどる企画展を開催
し、併せて東京都、千葉・埼玉・群
馬各県からの研究報告を通じて歴
史編纂の意義を考えるシンポジウム
を行った(『ひろば』七一号参照)。

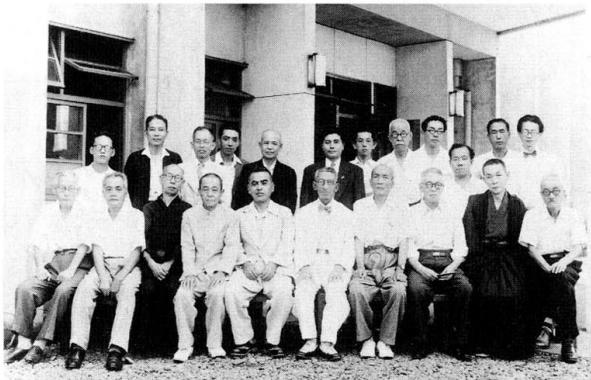
今年四月からは 国の行政改革の一環として 国立の文書館・博物館などが、十分なコンセンサスを得ないまま 独立行政法人へ組織替えとなり、また新聞等で、商業店舗よろしくその採算性的一面がセンセーション的に取り上げられており、今日、歴史資料を収集し保存すること、そして編纂することの意味、資料館（文書館）の役割をもう一度考えてみたい。

歴史を編纂叙述すること、それは個人史、或いは組織・団体史であれ、過去を振り返り、その歴史過程を確認しながら現在の姿を再認識することである。それは、歴史的存在であるすべての人間の本能であり、現在や将来が不透明であるほど、その欲求

○歴史の編纂

歴史を編纂叙述すること、それは個人史、或いは組織・团体史であれ、過去を振り返り、その歴史過程を確認しながら現在の姿を再認識することである。それは、歴史的存在であるすべての人間の本能であり、現在や将来が不透明であるほど、その欲求は強くなる。

歴史を編纂する場合の第一歩は、関連諸資料を集めることである。編纂の成果は、収集資料の質量、その内



『横浜歴史年表』編纂委員たち 1951、52年頃 石井タマ氏提供
前列左から西村栄之助(製茶、貿易)、飯田九一(文化)、牛田鶴村(文化、地誌)、輕部三郎(文化)、一人おいて平沼亮三市長、一人おいて一ノ瀬與左衛門(生糸、文化)、輕部龜松(文化、地誌)、斎藤昌三(文化)、後列 石井光太郎(事務局)、一人おいて中山沖右衛門(交通)、友野宏弥(宗教)、設楽巳知(生糸、文化)、二人おいて関靖(古文書)、青木虹二(事務局)、富田富十郎(政治・社会)、閑昌(文化)。

容に大きく左右されると云つても過言ではない。横浜の場合、市史編纂事業は一九二〇年（大正九）に開始されたが、市や県の他、政府機関や維新史料編纂会、東大図書館・史料編纂掛、三井家まで調査の範囲を広げ、また地元の研究者や資料収集家の協力を仰いだ。借用資料のうち必要なものは筆写され、校訂の上製本された。編纂費の大部分はこの筆耕料に

大な借用資料と写本を焼失し、持出した資料も混乱と難踏の中で散逸した。編纂資料焼失の打撃は大きく、結局未定稿の『横浜市史稿』全十巻の刊行に止まった。

纂事業の成果を継承するが、震災ではさんで当時の編纂係が作成した等は近世期からの古い文書記録を所蔵している。殊に、震災は近世期から古い文書記録を所蔵する旧家も多く被災し、領主の領内を含めて残った資料の記録化を進めた。 築城は市域外を含めて残った資料の記録化を進めた。
一九二七年（昭和二）時点 約千三百余冊を数えたが、その後の事業中断、収集範囲を擴張して、その他の事業も実施され、現存する資料は約二千冊に達する。
（一）は担当分野。

料や文書の保存管理体制の不備、戦中戦後の混亂等により、現在はその半数を回収するに過ぎない。しかし、筆写本の中には災害や空襲、家の建替えや世代交代等でその原本を失したものも多い。資料を災害から守ること、原本を他の記録媒体に複写することの重要性は歴史の教訓である。

○先人たちの眼差し

現在我々が享受している編纂事業の成果、継承した歴史資料は、例えわずかであれ、いずれも劣悪な条件と環境の中で資料の収集と編纂に従事した人びとの賜物である。

○資料館の役割
要性は歴史の教訓である。

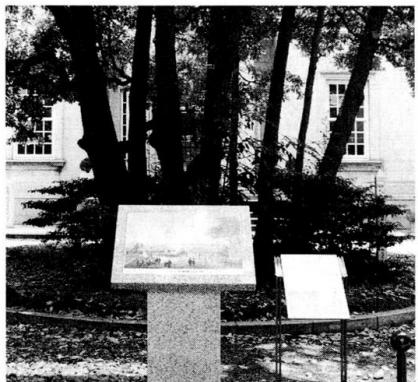
○資料館の役割

歴史資料は、個人や団体・組織活動の記録であり、自らを客観的に認識するための手段となる。人びと生活や社会活動の中で日々生み出され

彼らの仕事を引継いで市民の歴史資料を収集保存し、将来に伝える役割の重さを改めて痛感している。

れ、人の一生や出来事の歴史過程を
跡付ける記録である。そして、歴史
を編纂する際の素材ともなる。

歴史の証人「玉楠」は三代目？



ハイネ画「玉楠」樹種は？

「玉楠」とは横浜開港資料館の中で大きく葉を広げているタブノキのことだが、なぜこの木が「玉楠」と呼ばれているのかその名の由来は良くわからない。

タブノキの別名としても呼ばれるが、樹形が丸いからとも、木目に巻雲紋の現れたものともいわれている。古くからこの地にあり横浜開港の歴史を見続けて来たことから歴史の証人とも言われている。

しかし「玉楠」を前にし、説明板にあるハイネ画の「ペリー提督・将兵上陸の図」①に描かれている「玉楠」と目の前の「玉楠」とを見比べた時に、多くの人がいだく疑問は樹形の違いについてではないだろうか。

関東大震災によりこの玉楠も被災した事を知る人は多いが、その以前の歴史については不明な点が多い。そのなぞを解くひとつとして、樹形の違いについて考えてみた。

始めに玉楠を歴史上に登場させた

ハイネ画による「ペリー提督・将兵上陸の図」「水神の祠の図」②から樹種の特定を試みる。

この絵はペリー遠征の後に出版された画集の挿し絵として使われたもので、この絵を描いたハイネはドイツ人、ドレスデンの王立美術学校で美術と建築を学び、絵画の腕を見込まれペリー艦隊隨行画家となつた。

この絵について樹木に詳しい人達の意見を聞いてみると、人により見る目は異なるが、スダジイ、クスノキ、クロマツ等の外、幹はトウヒや杉、また落葉樹やレバノンシーダーなど様々な見方が出される。

周囲の状況から二枚の絵の対象樹木は同一樹木であると考えられるが、祠や鳥居等のディテールの表現から見ると「上陸の図」は、ペリーや将兵の上陸の様子に重点がおかれ、樹木や祠は点景物として描かれている。「水神の祠の図」は鳥居や祠等点景物の表現も細かく、樹木もある程度実物に近く描かれていると思われるが、現物を写実的に模写したものではなく、画家の持つている樹木のイメージによりデフォルメされていると思われ、絵から樹種を特定することは困難である。

大正期に入ると「横浜名所絵」⑦に「横浜の名木玉楠」があり、「玉楠」の名が付けられ、かなりのボリュームで描かれている。

その後、大正十二年の関東大震災により領事館、玉楠共に焼失した。震災直後の写真⑧を見ると樹形は現在のものに近い株立となっている。

震災による火災のため地上部が枯れたものの、根から出た新芽が成長したため、玉楠は昭和六年（一九三一）新築された英國領事館正面（現在の地）へ移植された。

が描かれ、「玉楠」とおぼしき樹木がそびえ立っている。

水神の森周辺は、横浜居留地覚書定され、水神社は現在の弁天橋近くにあった洲干弁財天へ遷宮（一八六五）となるが、玉楠はそのまま領事館用地に取り込まれた。

明治期の資料では玉楠が明確に描かれているものがないため、関東大震災直後の写真④から玉楠の位置を推測し、「横浜海岸異人館之図」⑤、「於横浜無類絶妙英國之役館」や、イギリス領事館写真⑥等明治期の資料を見てみると、玉楠らしき樹木があるものの比較的小さく描かれており、江戸期のような、大木の「玉楠」は見当たらない。

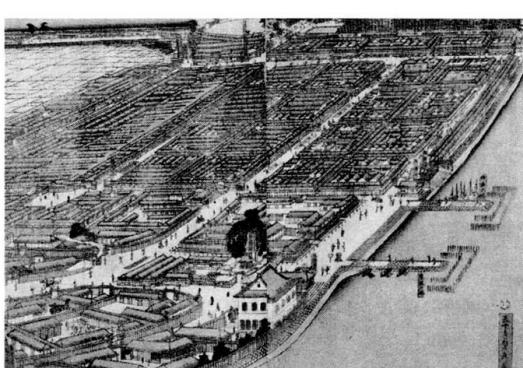
明治期の資料では、横浜居留地覚書定され、水神社は現在の弁天橋近くにあった洲干弁財天へ遷宮（一八六五）となるが、玉楠はそのまま領事館用地に取り込まれた。

ハイネ画の他に江戸期に玉楠が描かれたものとしては、「再改横浜風景」③、「御開港横浜大絵図」二編外「国人住宅図」、「神奈川横浜二十八景」等幾つかがあり、水神社と水神の森

江戸から昭和までの「玉楠」

「玉楠」の変化

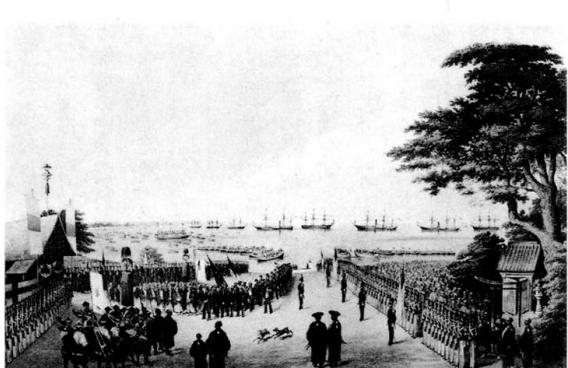
このように時代別に見ていくと江戸期には大木として描かれていた玉楠が、明治期になると若木とも思え



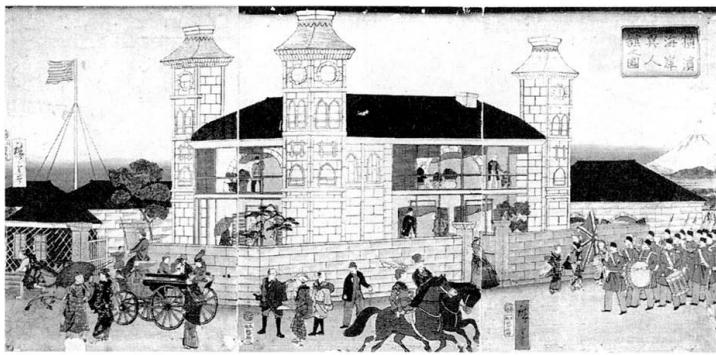
③再改横浜風景(1861年) 五雲亭貞秀画



②水神の祠の図(1854年)
Graphic Scenes of the Japan Expedition, by William Heine, 1854



①ペリー提督・将兵上陸の図(1854年) ハイネ原画による石版画



⑤横浜海岸異人館之図(1870年) 歌川広重(3代)画



④関東大震災直後の領事館 中央右よりの樹が玉楠。長島弘氏寄贈写真

る樹木が描かれている。

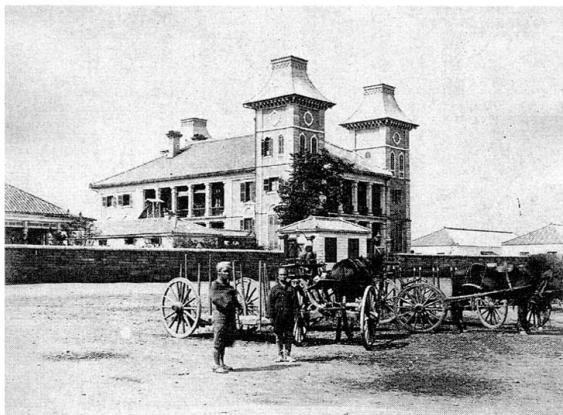
大正期になると再び「玉楠」として登場し、かなりのボリュームとなつて描かれている。

始めて歴史上に登場したハ
イネ画一枚と、震災直後の

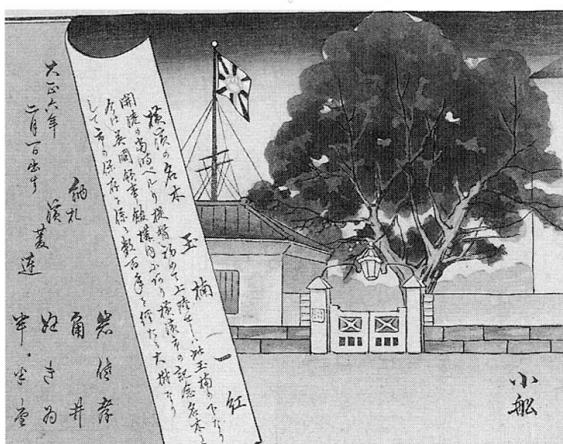
〔玉楠〕とを比較すると、明
らかに樹形が異なる。絵と写
眞との比較とはいえ、単幹の
樹木と株立の草木は明らかに

ハイネ画の描かれたのは一八五四年、震災直後の写真は一九二三年、その間六十九年である。約七十年の時間経過の中で、単幹の樹木が株立に変化することは、自然の状態にある。

伐採など何か他の力が加わったものと考える。なにが起つたのか。



⑥イギリス領事館(1871年) *The Far East* 1871 7 17



⑦權浜名所繪(1917年) 岡信孝氏寄贈

大火焼失区域図(9)で見ると、水神の森があつたと思われる区域も類焼しているが、玉楠が焼失したか否かは不明で明確には分からぬ。

三一六〇戸焼失」と大正八年（一九一九）四月（関外地区から出火、三二〇〇戸焼失）及び慶応二年の大火で、この火事は慶応二年十月二十日（一八六六年十一月二十六日）朝八時頃、末広町から出火、十四時間燃えつづけ、日本人街の三分の二、居留地の五分の一が延焼した。この際、横浜運上所等も焼失しており、この火事で「玉楠」も焼失した可能性が高い。

可能性の高い火事について調べてみると、関内周辺において数回火事が発生している。

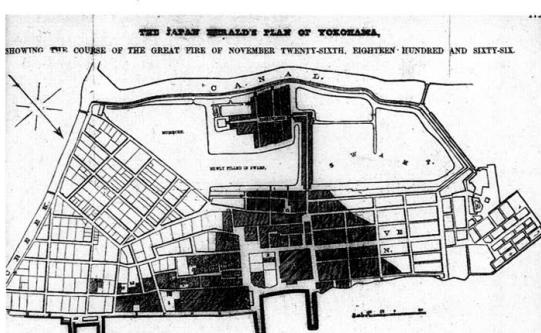
に領事館建設用地に指定されたため役宅等が撤去され、空地だったため家屋の被害として記録されなかつたのではないだろうか。一八六四年に領事館用地の指定を受けた後、火事の前年の一八六五年に水神社が移転していることから考えると、周辺の役宅も移転が始まっていたものと思われる。火事の様子を描いた山手からみても相当の猛火であり、玉楠も一緒に焼失したか、輻射熱により大きな被害を受けたものと考える。

仮説として

ペリーの隨行画家、ハイネの描いた樹齡三〇〇年と言われる「玉楠」は慶應二年の大火により焼失、或いは輻射熱により立ち枯れし、後に根元に

からじこには木が生え株立となつた。

根本から発生した
ひこばえが大きくな
成長し、「玉楠」
と呼ばれるように
なったが、関東大
震災により再度燃



⑨1866年大火焼失区域図 The Japan Herald Mail Summary, Market Report and Price Current, 1866.12.1



⑧震災時の玉楠の樹形

失し、再び根から発芽し現在のものとなつたという仮説が成り立つのではないだろうか。

従つて現在の玉楠は三代目と考えるがいかがであろうか。

新聞万華鏡⑥

明治中頃の横浜の新聞販売店

万字屋の新聞雑誌販売拡張広告

ほんと無い比率だうと報じていいので、横浜の新聞販売店は當時有り、望な職種であつたと思われます。

その後、明治三一年（一八九八）六月一二日付の『横浜貿易新聞』には、日の出屋新聞店が直配達六〇〇枚の祝宴を神奈川町対岸樓で開いたことを報じた記事が載っています。そして、『横浜成功名鑑』の出版された明治四三年（一九一〇）には、日の出屋新聞店はほとんど全国の新聞の取次をし、配達の部数も二〇〇

『横浜成功名鑑』（横浜商況新報）には、日の出屋太郎は、明治九年（一八七六）に横浜毎日新聞を発行する新聞社に入社し、同社が東京に移転した後の明治一五年に退社、一八年に住吉町四丁目五七に新聞販売店を開店しました。同年の四月一六日付の『朝野新聞』では、横浜で購読される東京の諸新聞は合計五四〇〇枚。購読者は一五人に一人、購読戸数は四戸で、一戸の割合となり、恐らく全国で

今回は、横浜の新聞販売店を見てみましょう。『神奈川県統計書』には明治一八年（一八八五）から新聞販売店の数が記録されています。この年の横浜市内の数は一五軒となっています。翌一九年は一三軒、二〇年は一二軒、二一年は一二軒、二二年は八軒、二三年は七軒、二四年から二六年は一五軒、二七年は二六軒、二八年は二二軒となっています。以下、この中から具体的に二軒の新聞販売店をとりあげます。

日の出屋新聞店

אָמֵן וְאַמְּנָנִים

日の出屋新聞店と並んで横浜を代表した新聞販売店に、太田町三丁目の万字屋がありました。この店が開店したのは、明治一九年（一八八六年）で、二月一一日付の『朝野新聞』には、万字屋が開店披露のため東京に演説会を開くことを載せており、開店披露に演説会を開くのはこれが始めてだ

○○余となり、本店の他に野毛町第一出張店、平沼町第二出張店、神奈川宮洲町第三出張店を構えました。

資料館り



▼展示

- (1)「横浜商人・繁栄の60年～野沢屋茂木商店とその人びと」 8/1(水)～10/28(日)
 (2)「東海道宿駅制度400年記念 開港場横浜と東海道」(仮称) 10/31(水)～平成14年1/27(日)

東海道」(仮称) 10/6-14 平成14年1/27(日)
平成13年は、東海道に宿駅制度が制定されて400年にあたります。本展示は、これを記念して開催するもので、幕末から明治初年にかけての東海道を舞台にしたさまざまな事件を紹介します。

(3) 「橘樹郡の近代～都市化する近郊農村
～」(仮称) 1/30(水)～4/21(日)

東京・横浜の二大都市間にあって、特異な地域社会を形成していた「橋樹郡」の近代の歩みを、地域に残された豊富な資料で辿ります。

迷うよう。

- ▼ 記贈資料

 - (1) 大正から昭和戦前期資料一括および
図書 12点、新聞・雑誌 13点 (鎌倉市小
町 岸秀雄氏)
 - (2) 東京朝日新聞神奈川版付録写真 (昭和
4年9月10日付け) 43点 (鎌倉市小町
新井美奈子氏)
 - (3) 浅野造船所絵葉書 (大正初期) 他4
点 (鶴見区市場上町 萩原貞雄氏)
 - (4) 横浜開港50年祭記念絵葉書 16点
(岐阜県関市千年町 佐藤美代子氏)

- ・会場 横浜開港資料館と中区根岸
 - ・講師及び講座名（開講順） 吉原健一郎（成城大学教授）「黒船渡来と庶民情報－『藤岡屋日記』にみる－」、平野正裕（横浜開港資料館調査研究員）「港都横浜が育てた美術工芸品」、岩田みゆき（神奈川大学日本常民文化研究所専任職員）「海村の暮らしと生業－武州久良岐郡柴村を中心にして」、久良岐の会「根岸村散歩」、八柳サエ（横浜美術館学芸員）「描かれた武州金沢－鏑木清方の游心庵絵日記を中心にして」
 - ・受講料 全5回で2,500円
 - ・募集人員 80名（多数の場合抽選）
 - ・応募方法 往復葉書に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、9月30日までに（当日消印有効） 〒231-2100 横浜市中区日本大通3 横浜開港資料館講座係へ（TEL 201-2100）

休館日等のお知らせ

- 休館日等の詳細は、
月曜日（9月24日と10月8日は開館）、
9月25日(火)、9月26日(水)、10月9日(火)、
10月30日(火)は休館させていただきます。
なお、閲覧室は、上記のほか、8月31日
(金)、10月31日(木)も資料整理のため休室さ
せていただきます。